

# 維新史 回廊だより

第5号  
平成19年  
(2007年)  
9月発行  
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一九三三二二二六二七

## ◇はじめに◇

「維新史回廊だより」をご愛読いただきありがとうございます。今回は、「四境戦争(第二次長州征伐)〜小瀬川口の戦い」の第3回として、小瀬川口の戦いで戦死した彦根藩士にスポットを当ててみました。彦根(今の滋賀県)からはるばる長州まで来て、戦いの中で命を落とした彦根藩士はどのような人だったのでしょうか。解説は、山口県史編さん委員会明治維新部会の上田専門委員です。

## ◇維新にまつわる事件簿◇

### 四境戦争(第二次長州征伐)〜小瀬川口の戦い③

#### ■四境戦争について

一八六四年、京都市中に進軍した長州軍が、御所に向けて発砲(禁門の変)したため、朝廷は幕府に長州追討を命じます。この時長州藩は、三家老四参謀を処分して恭順の意を示したため、征長軍は戦うことなく解兵されました(第一次長州征伐)。

しかし、その後藩主父子の処分問題や、長州藩内の情勢変化によって、一八六五年長州再征が決定され、一八六六年六月、幕府・諸藩の連合軍と長州軍との間に戦闘が開始されます(第二次長州征伐、長州戦争)。この戦いが、大島口、芸州口、小倉口、石州口と四つの国境を戦場としたことから、山口県では「四境戦争」と呼ばれています。

芸州口の緒戦である小瀬川口の戦いは、征長軍Ⅱ彦根井伊家と越後高田榊原家、両勢合わせて三千余人と長州軍Ⅱ萩本藩から派遣された遊撃軍を主力として、岩国領の武士、足軽、諸隊兵約七百五十人、農兵千人との間で、六月十四日午前四時半頃に戦闘が開始されました。

○小瀬川口の戦いは、どのようなきっかけで始まったのでしょうか。

和木町歴史資料館には、小瀬川口の戦いの一場面を再現した展示があります。登場人物は、長州軍側が、寺社浪人や在郷の強壯者が結成された岩国藩の団兵戦翼団の隊長品川清兵衛、征長軍側が、彦根藩一番手木股土佐隊の使番竹原七郎平で、六月十四日未明、小瀬川を挟んで両軍が対峙し、まさにこれから戦闘が開始されようという緊張の場面です。その時の状況を、藤田葆が記した「小瀬川戦争私記」(『岩国市史 史料編二近世』所収)の記述を参考にしてみましょう。

夜のまさに明けなるところ、小瀬川をはさんで対岸の大竹村にひしめく敵兵の中から、戦場における井伊家のシンボルカラーである赤い陣羽織を着けた武者一騎が、二人の従者とともに小瀬川を渡ろうとします。半ば程まで達した時、品川が指揮する戦翼団の筒先が一斉に火を吹き、騎馬武者と従者二人は忽ちにして銃弾に斃れ、もう一人は引き返してなんとか難を逃れることが出来ました。

品川はその武者の首を切り落として陣羽織に包み、岩国城下の兵局へ送ります。品川に討たれた人物こそが、和木町歴史資料館に品川と向かい合って立つ竹原七郎平でした。

この「小瀬川戦争私記」は、藤田が「吉川有恪公略伝」をはじめ、毛利家における維新史編纂事業の成果や諸記録・古老の懐古談等から、文久期より四境戦争に至る原因・経過を抜き出してまとめたもので、幕末期の岩国領周辺の動向を知るには格好の史料と言えます。しかし、その成立は大



竹原七郎平徒涉地点の碑 (和木町)

正二年（一九一三）十一月と、四境戦争から実に五十年近い年月が経過しており、歴史的事実の確認のためには、典拠となった史料に立ち返って内容を検証する必要があります。

○事実を確認する史料としては、どのようなものがあるのですか。

まず、停戦が成立した慶応二年（一八六六）の秋、品川重助（清兵衛）が主葬者となつて、和木町安禅寺に建立された、「彦根戦死士の墓」の墓碑銘を見てみましょう。

この墓碑銘は、戦死した彦根藩士の追悼を目的とすることから、そこには聊かの誇張や文学的表現が含まれていることは否めません。しかし、停戦後間もなく建立されていること、また一方の当事者である品川が建立に関与していることから、被葬者に関する情報については、信頼性が高いと判断されます。原文は、「小瀬口戦争私記」の中にも収録されており、撰文は岩国大草暢、書は二宮懋に成ります。

そこには、冒頭でまず彦根藩士の勇を称え、次に河畔に身を潜め指揮官の指示を待つ戢翼団の様子から、開戦、敵兵の動向、三人の戦死と墓碑建立に至るまでの経過が記されます。そして最後は、遠く異郷の地で戦死した彦根兵を称える言葉で締めくくられています。



彦根戦死士之墓(和木町)

それによると、戦死者の数は竹原ともう一人それに類する軍装のもの、すなわち同程度の身分の武士、そして海へ流された一人の計三人となっており、前掲「小瀬口戦争私記」引用の内容とは異同が出てきます。竹原は木牌を身に付けていたため、その身分・姓名が明らかになりましたが、もう一人にはそれがなく、姓名不明のまま竹原と共に合葬されたようです。つまり、安禅寺の彦根戦死士の墓には、この二人の武士が埋葬されたわけです。この姓名不明の武士は、「小瀬口戦争私記」が成立する頃には、既に歴史の中に埋没していたようです。

○この名前のわからない武士について書かれた史料はあるのですか。

彦根藩が六月二十五日に幕府へ提出した十四日の戦闘状況報告書を見てみましょう。そこには開戦時の模様が、「軍整列の上、天朝より仰せ出され候趣申し合わせとして、使番竹原七郎兵衛・曾根佐十郎差し越し、小瀬川涉り越し候ところ、賊勢防州脇村并八幡山より大小砲打ち掛け候」と述べられています（『新修彦根市史8』）。彦根勢は全軍整列した後、長州側へ朝廷からの降服勧告書を伝達しようと、使番竹原と曾根佐十郎を派遣しましたが、これに対し長州側が砲撃を加えたため、戦闘が始まったと説明されているのです。

ここから、竹原とともに戦死した姓名不明のもう一人の武士は、同じく木股隊使番の曾根佐十郎であったことが判明します。竹原は百二十石、曾根は七十石と、共に彦根藩井伊家中の中級家臣に属します。ここで二人が務める使番とは、騎馬で一隊の先頭に立つて進み、使者として敵陣に赴くほか、時に斥候を兼ね、敵情視察などの任に当たる役でした。

また、同じく十四日戦闘の際の死傷者に関する報告書では、他の戦死者が「討死」とのみ記されたのに対し、竹原と曾根の両名だけは、名前を列記した上に「敵方へ使いとして参り、帰り申さず候」と記されています（同前書）。軍使を討ち取ることは、当時の軍法に照らしても不適切な行為であるという観念が一般的でした。そこには軍使を打ち取った長州軍への非難が込められているのかもしれない。

○海に流されてしまったもう一人はどうなったのですか。

この遺体が流されたこと記されるもう一人の戦死者については、残念ながら他に手がかりは見つかっていません。井伊家はこの日の戦死者として、足軽や陪臣（家臣が召し抱えた家来）も含めて十人の姓名を幕府へ届け出ていますが、その中にも該当するとおぼしき人物は見当たりません。このことは、もう一人の戦死者の身分と関係があるように思われます。

「小瀬口戦争私記」には、竹原が二人の従者と共に川を渡ろうとした、と記されていますが、この従者というのは武家奉公人と呼ばれる非戦闘員であると考えられます。近世の軍団編成では、主人である武士とその従者一中間（武家奉公人）というのが、最小の戦闘ユニットでした。この武



家奉公人は、農村から徴発されたり都市部の日雇層から雇用されたりしたものが多く、馬の口取りや槍・鉄砲などの道具持ちを勤め、戦闘には参加しないのが原則でした。竹原や曾根が、このような中間を従者として召し連れて敵陣に赴こうとしたことは、十分に考えられます。もともと、前掲「小瀬口戦争私記」に見える二人の従者が、共に竹原の従者であったかどうかは分かりません。曾根もまた、相応に従者を従えていたと考えるのが妥当でしょう。

この従者は、武士が個々に召し連れるのが建前でしたから、藩もその正確な数を把握しておらず、また戦闘員ではないことから、戦死者数の中に含まれなかった可能性があります。長州側の史料に見える征長軍の被害と、実際に征長軍諸藩が幕府へ届け出た戦死者数との間には乖離があるような印象を受けますが、それはこのこととも関係があるのかもしれない。

### ○長州軍は竹原と曾根を軍使と知っていて攻撃をしたのでしょうか。

これについて、吉村藤舟の「芸州口戦記」には、「山口政堂の調書では、宛く使者とは思わなかったが、彼を打ちとつて、其身體を改めた時、懐から征討の勅允文と幕府の降服勧誘文とが出たので、初めてそれが使節であるということを知つたと云ふことである」との記述があります。これだと使者であるとは知らなかったことになりませんが、しかし、ここで参照されている山口政(事)堂の調書というのが、私の見た限りでは見つかっていません。それとは別に、開戦当時の模様を目撃していた第三者の証言がありますので、この第三者から見た二人の様子というのをご紹介しましょう。

慶応三年(一八六七)十二月に、大竹村組頭精次郎が割庄屋和田吉左衛門へ提出した「戦争已来長防運ヒ合諸駆引応答御注進書附」という報告書の中に、同村長百姓弥三右衛門が見分した合戦の次第として、「官軍先陣の内二人、狸々緋羽織を着シ、軍扇を開キ封書を差上げ、川中央まで押し渡り候」(『大竹市史 史料編1』)という記述があります。

ここから、竹原と曾根は、軍扇を開いて封書を高く掲げ、軍使であること明示して川を渡ろうとしていたことが窺えます。しかし中ほどまで渡ったところで岩国側からの銃撃を受け、それを合図に三方からの砲撃が始まり、二人は引き返そうとしますが、執拗な銃撃に終には撃ち落とされて首をとら

れてしまったということです。

もともとこの証言から、品川が二人を軍使と認めていたということとは出来ません。二人が軍使の作法で敵陣に赴いたことは確認できましたが、戦闘開始は未明のことでもあり、岩国側から見れば彼らが軍使であると正しく判別できたかどうかは疑問の残るところです。

またこの史料からは、竹原等二人の最期についても、前掲墓碑銘に記された「独三人奮いて前み、共に千丸に斃る」という様子とは違っていたことが窺えます。軍使として敵陣へ赴いた武士たちとその従者は、そこへ到達することなく銃撃されるとは思っていないのかもしれない。

### ○史料によって、書かれている内容にかなり差がありますね。

このように異なる立場から記された複数の史料をつき合せていくと、一点一点の史料を見ているだけでは分らない状況が見えてきます。それと共に、作成者の立場や意図によって、その内容が少しずつ違ったものになっていることもわかります。このように史料が作られた背景を読み解いていくことも、史料を解釈していく上で重要な作業です。

### ○県内で、他にこの小瀬川口の戦いで戦死した他藩人のお墓はありますか。

岩国市装束の弥勒寺にもう一基、首塚と呼ばれる「彦根戦士の塚」があります。装束農民団兵柏屋寿三郎に討ち取られた彦根藩士只木次郎右衛門を弔ったものです。

只木は井伊家臣団の中でも比較的高禄の二百五十石を給された武士で、二番手戸塚左太夫隊に属していました。弥勒寺の境内に建てられた案内板には、次のように記されています。



彦根藩一番手木俣土佐隊使番竹原七郎平像(和木町歴史資料館)

## 彦根戦士の塚

慶応二年（西暦一八八六）六月、四境の役、大竹口の戦にて安芸の国油見村において装束農民団兵柏屋寿三郎に打ち取られた彦根藩士只木小五郎（当時二十九才）の首級は、時の村役人嘉屋慶太郎によって当寺に懇ろに葬られ、この碑が建立された。



弥勒寺 彦根戦士の塚（岩国市）

（中略）

慶太郎はその彦根藩士の塚に碑文を刻して曰く  
この彦根藩何某、丙寅六月十四日大竹之役に勇戦自殺ス、これ忠なり、嗚呼称嘆せざるべからざるなり、碑を建てて以て美名を後世に貽すものなり

只木が属した戸塚隊は、三番手河手主水隊と共に油見村において三方を長州軍に包囲され、苦戦を強いられました。只木戦死の状況については、彦根藩井伊家臣団の禄高や来歴を綴った『侍中由緒帳』（彦根城博物館）に、「同年（慶応二年）六月一四日、芸州において、討死仕り候」と記されているのみで、他に史料が確認できていません。案内板の小五郎という名前は、次郎右衛門の跡を継いだ倅の名前と取り違えられた可能性があります。この只木戦死の情報は、はじめ不名誉な風聞として彦根へ伝わったようです。第2号でも紹介した「吉介翁自筆見聞雑記」（滋賀大学経済学部附属史料館寄託、真崎文庫、資料提供山口県史編さん室）には、早くも六月二十日条に大鐸子一からの情報として、「二〇〇石唯木鐘蔵外ニ一人脱走す、其故不詳」の記事が出てきます。鐘蔵とは、次郎右衛門の父の名前です。戦場の混乱で戦死が誤って脱走と伝えられたのでしょうか。油見村で討たれた只木の首級は、それを討ち取った寿三郎の出身村まで持ち帰られ、そこで埋葬されました。禄高二百五十石を食む堂々たる武士が、農兵に首級を取られるというその最後は、四境戦争における征長軍と長州軍の軍事力の質の違いを象徴しているといえるのかもしれない。

## ◆企画展等情報◆

▼萩博物館（萩市大字堀内三五五 電話 〇八三八二五一六四四七）

萩博物館リニユーアル・松下村塾開塾百五十年記念

長州男児の肝つ玉 ～松門四天王と桂小五郎～

（平成十九年九月十五日～十二月十六日）

今をさかのぼること百五十年前の安政四年（二八五七）、萩松本村にわずか八畳の講義室しかもたない私塾が開かれました。その名は松下村塾。塾生たち自らの手で増築された建物は、そのまま現在に伝えられ、今なお全国から訪れる人々に深い感銘を与え続けています。

塾を主宰したのは吉田松陰。指導したのは三年にも満たない短い期間でしたが、松陰の「志」を受け継いだ塾生たちは、幕末から明治にかけての日本をリードしてゆきます。

本展覧会ではとくに、「松陰門下の四天王」とうたわれる高杉晋作・久坂玄瑞・吉田稔麿・入江九一、そして「塾生の兄貴分」であった桂小五郎（木戸孝允）の生きざまを、彼らが残した資料からたどります。下関での挙兵を前に「長州男児の肝つ玉をお目にかけてます」と誓った晋作。幕末維新の変革に命をかけた若き塾生たちの思いに迫ります。詳しくは、萩博物館ホームページ（<http://www.city-y.hagi.yamaguchi.jp/hagihaku/index.htm>）をご覧ください。

観覧料は、大人五〇〇円、高校・大学生三〇〇円、小・中学生一〇〇円（二十名以上の団体はそれぞれ二割引）です。

「あながき」第五号の維新史回廊だよりは、小瀬川口の戦い第三弾として、戦端を開きつかけとなった六月十四日の事件について、様々な史料から真相を追ってみました。異なる資料を突き合わせることで、歴史に埋もれた一場面が、鮮やかに甦ってきます。次号は十二月発行の予定です。維新史回廊だよりは、県政資料館、県内の市町文化振興担当課、博物館・資料館等に置いてあります。また、維新史回廊のホームページ（<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/shin/index.html>）でも同様の内容をご覧いただけます。